

◆第15話◆ 自校史教育と自校史

近年、大学では、「自校史教育」に括られる学科目を設ける風である。教科書（テキスト）として使用されるのは、自校史から派生した「普及版自校史」が多い。正史たる自校史は、その紙幅の多さから、テキストには適さないと考えられているものと思う。また、加えて創立者の伝記の類は、テキストに使われるようである。

自校史教育の効用は、何であるか。

それは、入学した大学に対する帰属意識と愛校心の醸成であるとされる。つまり、2015年の名古屋大学における寺崎昌男東京大学名誉教授の講演では、「学生たちは何を学ぶか」というと、自分の位置、所在、帰属を、良き自校教育を受ける中で得ることができるのです。自らを取り巻く願い、配慮、努力が分かって安堵」できることが自校史教育の効用であると説明している。そうして、「学生たちは何を学ぶか」というと、自分の位置、所在、帰属を、良き自校教育を受ける中で得ることができる。」というのである。

『朝日新聞』（平成24（2012）年10月12日）の記事は、「自校教育は1990年代後半から本格化した。80年代から各大学で大学史を編む作業があり、資料収集が進んだことが背景にある。岩手大学（盛岡市）の大川一毅准教授（肩書当時、教育学）が2008年に全国752大学に尋ねたところ、136校が『自校教育を実施している』と答えた。自校のことだけで授業をつくったり、授業の一部で自校の歴史に触れたり、やり方はさまざまだった。『検討中』も33校あった。『増加期は一段落し、今は各大学が授業の改善や充実をしている段階だ』とみる。」と記している。

拓殖大学の『同窓會報』第6号（明治44年6月30日、東洋協會専門學校同窓會）に「校風論」（在学 橋本白秋）という一文が掲載されている。そこには、

上に立つ人格は修養團體の精神的特色の本尊で言わば校風の中心で此の人格の代る度毎に又校風も幾分か夫々の特色を映じ加味して多少の變遷を受けなければならぬ……學校の組織制度に變更がなく引續きて這入る學生が愛校の精神に燃へ向上進歩の思想と又尊古懷舊の念を具有する人であつたならば彼等は必ずや古き歴史を逗りて其當時の校風精神を採り益々その改善向上に努力するからである

……

校風の維持發展は實に『後繼者たるべき者の歴史的責任なり』と斯くの如く考へれば校風自身時に衰ふる事あるとも滅亡する事はない此點に於て『校風の歴史は正に一國の精神的歴史と同一である』忠君愛國の念に富みたる我國民により二千五百有餘年を一貫して大和魂が維持發揮された如くに校風は即ち後繼者によりて永久の生命を有するものである

という記述がある。まさに、大学の維持、継続、發展は、後繼者次第という側

面を無視できないと言っている。創立後、十余年にして抱いた東洋協會専門學校学生の意見である。

自校史教育は、校風を受け継いでいく作業といえるのだろうか。そして、自校史編纂は、校風をいかに表現するかというところにその存在を意義付けることができるかと申し上げて差し支えないであろうか。